

異文化における言語環境および言語学習に関する調査研究  
—動機づけの視点から考えて—

陳 惠貞

言語を習得する際には、学習する動機と環境に大きく左右される。言語を獲得する初期段階には、その言語を使っている人たちと接触し、付き合うことによって話す習慣を身につけることが大切である。話したい思いがあり、話したい相手がいることこそ、会話が成立し、言語を学習する動機づけになる。このように、「わたし」と「話したい思い」と「話したい相手」の「三項関係」<sup>注</sup>は、多くの子どもにとって、親との会話つまり家庭内のコミュニケーションによって言語を学習する動機の原点となる。

自国で生まれ育ち、母国語を習得するだけでは、さほど問題はないであろう。しかし、グローバル化の著しい現代社会では、そう単純ではない。日本のことを例にとると、現在の日本は間違いなく、国際社会である。大勢の日本在住外国人こそが、日本を国際化の道に導いた最大の要因と言えよう。日本在住外国人が直面しているのは、まず言葉の問題である。陳（2008）は「子どもの言語発達と異文化における多言語教育」というテーマで論じた。その中で、留学生の子育てを事例として、①言語発達 ②親子間のコミュニケーションや愛着の問題 ③異文化間コミュニケーションの3つの側面から探り、外国人の子どもの言語発達に関わる諸問題を提起した。乳幼児期・学童期・思春期・青年期のそれぞれの年齢層の子どもにとって、異なる問題と課題が存在している。異文化の影響を受け、異国の言葉の問題に直面し、異なる年齢層の子どもにどのような特徴があらわれるであろうか。

現在、日本に住む外国人の子女は日常会話として、もちろん日本語が優位であろう。しかし、将来いつまで日本にいるかは、自分で決められないという実情は現実的に存在している。そうすると、日本語の他に、母国語はもちろん、英語も学校教育の一環として学ばなければならない。このような多言語教育を強いられる環境の中で、多くの外国人親子はどのようにしているであろうか。外国人のおかれる複雑な事情の中で、それぞれ国柄や家庭の事情もあり、一概には言い切れない。また、子どもの年齢によって、それぞれの年齢層に異なる問題点と課題がある。前回、陳（2008）の「子どもの言語発達と異文化における多言語教育」で、研究方法として「質問紙調査」と「インタビュー」のデータをとった。しかし、紙面の関係で親への「インタビュー」の内容のみに止まった。今回は、前回の研究でとった3つの「質問紙調査」の未分析データを中心に、更にケースを加え、ケースごとに考察することにした。よって、調査の時期について、ケース1～3は、2008年1月に行ったものであり、ケース4～8は2009年12月に行ったものである。時期の差があるものの、すべての被験者は日曜日ごとに、子どもを

注 石井（2004）に参照。

中国語教室に通わせている母親である。配偶者の国籍が異なることによって、中国語は子どもたちにとって、母国語であったり、学習言語であったりする。被験者の内訳として、表で示す。

被験者の出身地・配偶者の国籍・子ども人数の内訳表

出身地	配偶者		子ども人数	
	同じ国籍	異なる国籍	一人っ子	二人兄弟
中国（4名）	3組	1組	2世帯	2世帯
台湾（4名）	1組	3組	2世帯	2世帯

質問紙の項目内容は以下の通りである。紙面の関係上、多くのケースを紹介するため、ケース・スタディーの回答内容は一部省略した。

1. 被調査者の国籍・氏名（個人情報保護のため、イニシャルで示す）、年齢・性別、配偶者（国籍）、子どもの年齢・性別など家族構成、調査期日、在住地域
2. 日本にきた動機（時期や費用など）
3. 経過（どのように申請したのか）
4. 家族構成と住居の現状・環境
5. 来日後の住居の変遷
6. 子育ての経過と学校教育（就学前教育を含めて）
7. 職歴と現状
8. 今後の計画
9. 子どもの将来について
10. 直面している諸問題
11. 子どもの学習言語の習得程度  
「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価
12. 子どもの母国語の習得程度  
「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価

今回、子どもの言語環境に重点をおき、家庭環境を親の来日動機・経緯・仕事関係から考察することにした。個人情報保護のため、名前はイニシャルにし、会社名・学校名・保育園名・幼稚園名などはすべて匿名とした。そして、母国語と学習言語の判断は、父親の国籍によるものとする。今回扱ったすべてのケースは、子どもの国籍がすべて父親と同様だからである。さらに、子どもの学習言語と母国語の習得はどの程度であるかについて、「書く・読む・聞く・話す」のそれぞれを「支障なし・単語程度・全くできない」の3段階評価とした。なお、今回の被験者は、ケース1を除いて、すべて愛知県在住である。ちなみに、ケース1は、遠方に単身

赴任中の被験者が愛知県にある自宅に戻ったときに調査したものである。以下、ケース・スタディーによる考察を行う。

#### ケース・スタディー1

1. 中国人Wさん、38歳女性、夫（日本人）と11歳の長女の3人家族  
2008年1月6日、可児市
2. 1989年に自費留学で来日しました。
3. 高校卒業後、日本へ留学したくて、日本語学校を申請し来日した。
4. 夫と娘は2年前に建てたマイホームに住んでいます。私は東京に住んでいて、単身赴任中です。周りはほとんど日本人です。学生時代から日本語を勉強するため、積極的に日本人と付き合い、中国人の友達は少ないです。
5. 最初は名古屋市に住んでいて、日本語学校と大学、大学院に通いました。後に結婚し、可児市に移住しました。
6. 娘は日本生まれ日本育ちです。私は仕事をしているので、保育園に通わせました。5歳のときに小学校入学する前、最後のチャンスと思い、出張のついでに中国に連れ帰り、そのまま1年間中国で教育をうけさせました。1年後日本に戻り、小学校1年生になり、いまは小学校5年生です。
7. 最初は留学生でしたが、大学院卒業後仕事をみつけ、正規社員として働いています。
8. いまの仕事は中国への出張がかなり多いので、日本と中国の間に行き来しています。子どもの生活と教育は夫に任せきりの状態です。一生仕事を続けたいですが、どこで生活するかは、特にこだわらないです。
9. 娘にはどこへ行っても、強く生きるように育てたいです。そのためにいまは、中国語の他に英語、二胡、塾に通っています。1年間中国で教育をうけさせたとき、最初はよく泣かれました。電話で「日本に帰りたい」と訴え、「ママは私のことが嫌いになったの?」とか、「ママは私を捨てるの?」と母親の愛情を疑い、同情をさそうような口調で訴えました。親として、子どものためと思い揺れながらも、心を鬼にして頑張ったつもりです。時には、残酷すぎると思いますが、自分自身働きながら痛感したのは仕事の面での厳しさです。とりわけ語学力の大切さです。仕事柄、よく中国へ出張しますが、年々の変化が目まぐるしいです。特に、これから中国との関わりが深まる一方、また、これから中国の発展を見込んで、やはり娘に中国語を習わせないといけないと思っています。中国にはビジネスのチャンスがいっぱいあり、いま世界中の人々が中国語を習う人が多いですよ。せっかく娘は中国人の母親を持ち、恵まれているのだから、習わないともったいないです。

中国で幼稚園に入園させ、毎日中国語を聞ける・しゃべれる環境を作っていました。最初は抵抗し拒否をしましたが、暫くして諦めがついたのか、やがて慣れてくれました。1年後、日本に戻り、小学校に入学しました。帰ってきて、日本語に慣れるにはさすがに時間はかからなかったですね。しかし、せっかく身につけた中国語を忘れてはいけないと

危機感を感じたので、中国語教室を通わせることにしました。また、家では私は娘としゃべるときはすべて中国語で、娘は日本語で話しかけてくると知らないふりをして徹底しました。中国語でしゃべらないと答えないようにし、私と会話するとき、すべて中国語で決めました。これも最初娘は反発しましたが、私は「また中国へ送り返すよ」と脅しました。娘は「また捨てられる」と思ったのか、私の顔色をうかがいながらもやっとなんとか妥協してくれました。ただ、いま問題になっているのは、私が仕事の関係で単身赴任中だということです。めったに家へ帰れず、親子の会話が減る一方です。なので、毎日電話をし、また日記を書かせて、ファックスで送ってくるようにしています。私はそれを手直しして、また送り返すというように頑張っています。大変だけど、そうでもしないとなかなか長続きできないと思います。中国語教室は週に一回しかないからです。娘はもう5年生、将来のことも考えて、毎日塾も通わせています。考えてみると娘も大変忙しいです。毎日学校が終わってから、仕事をしていない旦那は弁当を持って娘を迎えにゆき、弁当を食べさせてからすぐ塾へ送ってもらいます。平日は十時まで塾で過ごし、土曜日はお昼までは塾で勉強をさせています。土曜午後は習い事(英語と二胡)で、日曜午前は中国語教室でしょう。考えてみれば大変は大変ですね。でも日本のゆとり教育はどうにもならないから、学校教育に頼るとだめになりますよ。

中国語教育はこれからも続けたいといけません、まだまだ中国語の大事さと楽しさが娘には実感できていませんが、いつか親心が分かってくれると思います。いつか感謝される日が来ると信じています。

10. 娘はそろそろ思春期を迎える事に少々不安を感じます。私は仕事人間なので、単身赴任でも、出張でも全然苦にならない人です。いままで、娘のことを夫に任せきりでも全然平気でしたが、娘の成長によって、このままでいいだろうかと時々思うようになりました。
11. 子どもの学習言語(中国語)の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。
12. 子どもの母国語(日本語)の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。

考察：Wさんは強い信念の持ち主だと見受けました。娘への愛情が深く、時には残酷のようにもみえた。語学教育では、本人が一貫して、同じ言語で会話することは、大変効果的であり、よいことだと思われる。さらに、書くことを娘に「強要する」ところまで頑張っている。現代では、ここまでの教育方法は大変珍しいことだと評価できる。しかし、母親に甘えられなかった分、これまで押さえつけられた分の今後の反動が不安の要因として推測され、追跡調査をする必要があると考えられる。本人は単身赴任中で、子どもと遠く離れていることが教育上は悪条件だといえる。しかし、これを工夫し、克服している現状にある。「毎日電話をし、また日記を書かせて、ファックスで送ってくるようにしています。私はそれを手直しして、また送り返すというように頑張っています。大変だけど、そうともしないとなかなか長続きできないと思います」このように悪条件を克服するような並大抵な努力に感服する。

## ケース・スタディー2

1. 中国人Xさん、34歳女性、夫（中国人）と9歳の長男の3人家族  
2008年1月13日、名古屋市
2. 1997年に家族滞在で、自費で来日しました。
3. 家族滞在の申請で来日しました。
4. 夫、1人息子と普通のアパートに住んでいます。日本人の友人がたくさんいます。
5. 夫は留学生だったので、大学の留学生会館に1年間住み、その後は民間のアパートに住むようになりました。
6. 私はパートの仕事を再開しましたので、息子が3歳の時から保育園に通わせました。だから3歳まで、家にいました。日本の保育園2年間、5歳のとき1年間中国に帰り、向こうの幼稚園に通いました。1年後日本に戻り、小学校1年生になり、いまは小学校3年生です。
7. パートの仕事をしてきました。
8. 子どもの教育もあり、夫の仕事が安定であれば、しばらく日本に住みます。
9. 別に息子に期待とかはないけれども、これからはずっと日本にいられるかどうか分かりません。将来もし国へ帰るとしたら、困らない程度でいいからと思って、中国語も英語も勉強させようと思います。
10. 家では基本的に中国語で話しますが、最近になって、親と会話する時に日本語交じりが目立つようになってきました。中国語で表現しきれない時に、どうしても日本語で答えるようになったことは、日本語優位になりつつあることに不安を感じています。
11. 子どもの学習言語（日本語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。
12. 子どもの母国語（中国語）の習得は、書く・読むは単語程度で、聞く・話すことは支障なし。

考察：インタビューのデータとつき合わせて考察してみると、Xさんの子どもは大変適応能力が優れた子のようなのである。全く抵抗なく親元を離れ、祖父母と一緒に帰国し一年間を過ごしたそうである。大らかで、拘りのないような子どものように見受けられた。現段階では、性格や適応能力の良さで学習していけば、問題がなさそうだ。しかし、「中国語で表現しきれない時に、どうしても日本語で答えるようになったことは、日本語優位になりつつことに不安」という親の不安のように、学習言語優位のネックにさしかかっている様子が伺える。母国語の学習内容を年齢のレベルに沿った語彙や表現力の習得を伴わない限り、「書く・読む・聞く・話す」が揃ったバイリンガルになることは難しいであろう。

### ケース・スタディー3

1. 中国人Cさん、49歳女性、夫（中国人）と22歳の長女、10歳の長男の4人家族  
2008年1月20日、名古屋市
2. 1992年に家族滞在で、自費で来日しました。
3. 最初、主人は私と娘を国に残して、国費留学生として一人で日本にきました。娘は6歳に

なってから家族滞在の申請をし、やっと日本にきました。

4. 娘はアメリカ留学中で、現在、夫と息子の3人暮らし。市営住宅に住んでいます。周りは日本人の友人がたくさんいます。
5. 最初は大学の留学生会館に住み、卒業後市営住宅に引っ越しました。
6. 娘は6年間の小学校生活を終えてから、自分の意志で中国に帰り、中学校と高校生活を終え、アメリカに留学しました。いまは大学4年生で、もうすぐ卒業なので、そろそろ就職活動です。息子は日本の保育園を通い、現在小学校4年生です。
7. ずっと子育てをしながら、パートをしています。
8. 夫が仕事を続ける限り、日本に住む予定です。息子のこともあるし、息子もアメリカへ行くと言い出したら、どうなるかまたはっきり分かりません。
9. 娘は昔から大変自立している子で、なんでも自分で考えて決め、行動するので、親としてあまり心配することがないです。アメリカへ留学することも自分で大学を決め、奨学金をもらって通っています。いままで大学生活の3年半、かなり忙しくて、なかなか中国と日本には帰れなかったです。なので、私は毎年息子を連れて会いにいきました。娘は、中国語はもちろん、英語と日本語もできるので、どんな仕事に就くかは楽しみです。  
息子は娘と12歳も離れています。小さい時からなかなか一緒に遊ばなかったです。というより、兄弟といっても一緒に生活する時期が大変短かったです。娘は中学と高校は中国に帰ったので、夏休みとか冬休みしか家族がそろいません。私たち夫婦は日本での生活が安定してから、もう一人子どもがほしいと思った時にできた子なので、夫が大変可愛がっています。日本生まれ日本育ちなので、幼い時から保育園に通い、自然と日本語でしゃべっています。彼にとっては、日本語の方が楽で母語になっているようです。家では一応中国語で話しますが、息子は日本語でしか返事してくれません。悩んでいた矢先に、友人に相談をしたら、中国語教室を紹介してくれたので、通い始めました。ちょうど息子が5歳の時でした。最初は読み書きが難しくて、あまり興味がなさそうで、ついていけなかったので大変でした。しかし、暫くしてから聞き取る力だけは優れていたもので、好きな文章や物語があったりすると、読んだりすることもできるようになりました。中国語教室に通っているおかげで、家では中国語で親と会話ができるようになりましたよ。いままで、家族そろった時、息子だけが外国人みたいでしたが、いまは中国語で交流できるようになりました。やっと家族らしくなりましたよ。息子は甘えん坊で、娘のようにしっかりしていないので、将来どうなるか分かりませんが、いまのうち、たくさんの習い事をさせたいです。中国語の他、英語、囲碁、空手、水泳、書道、そろばん、公文など習っています。
10. 子どもの教育と私たち夫婦の老後ですね。
11. 子どもの学習言語（日本語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。
12. 子どもの母国語（中国語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。

考察：Cさんは当時6歳の長女を連れ、元留学生の夫のもとにやってきた。日本の友人が大勢いる環境にいたようである。長女は自立した子どものようで、しっかりと自分の道を決め歩ん

でいる。それに比べ、Cさんは長男に対して大変教育熱心の様子である。Cさんの長女は6歳まで、母国語を獲得してから6年間の日本語教育を受けた。それから、中学校と高校の6年間は母国語と英語を習得し、アメリカ留学をしたので、成長段階に合った教育を受けた。それぞれの習得した言語のレベルを確認する必要があるが、最も成功した多言語教育だと評価する。これは、Cさんの長女は学習に対する意欲と自立した性格で、自ら進んでやろうとしたからできたことであろう。さらに、それぞれの言語レベルがどの程度に達しているかを確かめることが今後の課題とする。

Cさんの長男は現在10歳という年齢で、現段階では「書く・読む・聞く・話す」の評価が全て支障なしとなっている。しかし、これからは日本の学校教育をうけ、成長していくと、学習言語の日本語が優位になると予想される。Cさんの長女のようにバランス良く、言語環境を変えながら学習することができるかどうか。または、家庭内においての母国語学習で、学習内容が年齢のレベルに沿った語彙や表現力の習得につながるかどうか、いずれにせよ、「書く・読む・聞く・話す」が揃ったバイリンガルになることが望まれる。

#### ケース・スタディー4

1. 中国人Bさん、46歳女性、夫（中国人）と20歳の長女、13歳の次女の4人家族  
2009年12月19日、名古屋市
2. 1992年に家族滞在で、自費で来日した。
3. 家族滞在の申請で来日した。
4. 夫、娘2人と本人。自分の家、普通の住宅街。日本人の友人がたくさんいる。中国の友人もたくさん近くに住んでいた。
5. 大学の留学生会館、市営住宅、四年前に my home を購入した。
6. 長女は、日本の保育園、小学校、中学校、高校、現在大学2年生。次女は、日本の保育園、小学校、現在中学1年生。
7. アルバイト、中国語を教えている現状。
8. 夫定年まで日本に住むつもり。
9. アメリカに留学させたい。
10. 子どもの教育、中国にいる両親のことを心配している。
11. 子どもの学習言語（日本語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。
12. 子どもの母国語（中国語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。

考察：Bさんは長女を連れ、元留学生の夫のいる日本にやってきた。これは、当時中国にいた配偶者が日本にきた動機として、一番多いようである。周りに自国の友人がたくさんいて、日本の友人も大勢いる環境にいるようである。また、子どもたちは普通に日本の教育を受けてきたが、家庭内で母国語をしっかり教育したようである。子どもの将来について伺ったところ、「アメリカに留学させたい」という答えは、自国の友人の影響だそうである。

#### ケース・スタディー5

1. 台湾人Tさん、46歳女性、夫（日本人）と9歳の長男の3人家族。  
2009年12月19日、春日井市
  2. 留学したかったから、願書を出したら、入学の許可があり、それで留学生として来日した。  
留学するまで、仕事で貯めた貯金を使い果たし、留学費用としてきた。
  3. 留学経験者の友人から、留学先の母校が台湾で説明会を行われると聞き、説明会に参加した。その場で願書ももらい、後日、必要な書類をそろい、日本の大学へ送付し、しばらくすると、入学許可書がおりた。
  4. 本人・夫・息子の3人家族で、日本人の友人が多い。
  5. 留学時代は、6畳1間のワンルーム・マンション、結婚後は3DK古いアパート、数年後事務所兼住宅の一軒屋を購入した。
  6. 子どもは日本生まれ、日本育ちで、日本の保育園だった。いまは小学校3年生。
  7. 自営業を営む夫の仕事を手伝う事務職。
  8. 子どもの教育に専念したい。
  9. 立派な国際人になってほしい。
  10. 子どもの学力をもっと身につけてほしい。日本の教育現状からみると、子どもの学力に大変不安にならざるを得ない。このままでは将来的に国際的な競争力が大変弱くなることが一目瞭然なので、子どもが小学校5年生から学力強化に集中したいと思う。また、子どもに語学を勉強させるため、短期語学留学を計画している。
  11. 子どもの学習言語（中国語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て単語程度。
  12. 子どもの母国語（日本語）の習得は書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。
- 考察：Tさんは留学生として日本にきた。留学の動機は、友人の影響のようである。本人は日本の環境に大変馴染んでいて、生活そのものを楽しんでいるようである。子どもの語学教育に力を注いでいる様子が伺える。子どもの学習言語である中国語がなかなか上達しないので、近々子どもに語学を勉強させるため、短期語学留学を実行しようとしている。子どもを「国際人」に育てるため、日本人配偶者の夫の協力を得ながら、中国語教室に通っている状況である。

#### ケース・スタディー6

1. 台湾人Pさん、41歳女性、夫（日本人）と13歳の娘と3人家族  
2009年12月20日、知立市
2. 1982年に学習の目的で来日した。来日の費用は持参してきた。
3. 学校の申請手続きをし、入国管理局の許可をえて来日した。
4. 主人と13歳の娘と家族3人。現在の住まいは一軒屋で、周りに日本人の友人が多い。
5. 来日後、現在と同じ。
6. 子どもは日本で生まれた。保育所2年、幼稚園1年、小学校6年、現在は中学校1年生。
7. 車関係の仕事、現在ジュエリー店のパートも兼ねて。



8. 子どもの教育が一番に考えている。語学を中心に勉強し、仕事と子どもの教育を両立させるように頑張っている。
9. 子どもに「将来は何をやりたい?」と尋ねると、聞くたびに変わる。自分は子どもにできれば言語能力を高めるために学習をしつつ、将来は通訳と翻訳の仕事ができるようになってほしい。
10. 教育問題、経済の不安定さ。
11. 子どもの学習言語（中国語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なしまではいかないが、単語程度以上。
12. 子どもの母国語（日本語）の習得は書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。

考察：Pさんは日本にきた動機として、留学することであった。留学先で配偶者と出会い、一旦帰国したが、7年越しの長距離恋愛を乗り切り結婚したそうである。環境に大変馴染んでいる様子である。子どもの語学教育に力を注いでいる様子が伺える。来日後、現在の一軒屋に住み、経済的にはゆとりが感じられたが、昨年のリーマンショックによって、配偶者の車関係の仕事が不安定な状態に不安を感じたそうである。子どもの学習言語である中国語について、日本人の配偶者は関与していないようで、Pさんの努力によって子どもが中国語検定の4級をパスしたようである。観察したところ、子どもが積極的に努力する動機が見当たらないが、被験者は子どもが自然に覚えたと言っていた。

#### ケース・スタディー7

1. 台湾人Sさん、48歳女性、夫（日本人）と17歳の長女、14歳の次女の4人家族  
2009年12月20日、知立市
2. 大学卒業後、仕事を通して夫と知り合い、結婚のため来日した。費用は自分で払った。
3. 結婚し、入国管理局に申請し、在留資格を得た。
4. 夫と自分と娘2人の4人家族。普通の日本人の地域に住んでいる。日本人の友人がたくさんいる。PTA役員や子ども会役員は経験済み。
5. 自分の家（1軒屋）を建てた。団地より自分の家に引っ越した。
6. 娘2人は、普通の保育所に行った。長女は小中高が全て公立学校、次女もその予定。
7. 同じ会社で働いてきた、今後も継続する予定。
8. 定年まで働けたら、働き続けたい。定年後、再就学するか。
9. 日本で就職し、生活する。
10. 文化の理解、言葉の壁、人間関係、老後の計画、健康の維持
11. 子どもの学習言語（中国語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。
12. 子どもの母国語（日本語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。

考察：Sさんは今回の調査で、台湾人の被験者の中で、唯一結婚が目的で来日したケースである。また、唯一正社員として、継続的に働きながら子育てをしているケースである。仕事を通して、日本人と付き合い慣れている様子が伺える。日本の環境に大変馴染んでいるようである。

経済的に安定し、定年後の計画を立て、向学心があるようである。子どもの教育に特に力を入れる様子もなく、しかし、子どもたちはバイリンガルに近い様子が分かった。これは調査中に、Sさんが子どもに対し、一貫して自分の母国語で話している様子を観察でき、判断できたものであった。また、10年以上にわたる日本人の配偶者の中国語教室への送り迎えの協力を得て、できたものだと言ったSさんが誇らしく語っていた。功を奏すのも配偶者の協力と努力が不可欠だと思われる。

#### ケース・スタディー8

1. 台湾人Yさん、46歳女性、夫（台湾人）と18歳の長男、15歳の長女の4人家族  
2009年12月27日、名古屋市
2. 専科学校卒業後、2年間仕事を経て、1988年に自費で留学しに日本に来ました。
3. 日本語学校を通して入国管理局に申請し、留学生の在留資格を取得しました。
4. 夫と自分と長男と長女の4人家族です。マンションに住み、周りは日本人ばかりです。
5. 留学生時代最初は東京で、普通のアパートに住んでいました。主人は大学の先輩で、結婚してから、仕事関係で名古屋に移り住み、2年前にやっとマンションを購入しました。
6. 子どもたちは幼稚園に通わせました。息子は公立の小学校・中学校・高校で、娘は公立小学校・中学校です。
7. 留学生時代は少しアルバイトをしました。結婚後、長男が生まれるまではアルバイトをしました。子どもが生まれてからは、専業主婦になりました。娘が中学校に入ってからパートの仕事を始めました。いまは、家のローンもあり、正規の仕事を探しています。
8. 子どもたちは日本生まれ日本育ちなので、生活の基盤は日本にあります。定年まで働いたら、働き続けたいです。子どもたちが成人するまでは日本で頑張るつもりです。私たち夫婦は老後、日本に住むか台湾に帰るか、まだ決まっていません。
9. 日本で就職し、生活すると思います。留学するといわれたら、行かせてあげたいですね。私が専業主婦になったのは、子どもたちを教育するためです。特に長男のとき、思いつくお稽古を全部付きっきりで、連れて行ってあげましたよ。例えば、水泳・英語・ピアノ・バイオリン・絵画・柔道・将棋・囲碁・そろばん・・・教え切れないくらい習わせましたよ。特に水泳は得意で、学校代表として選ばれ、試合に出たくらい上手ですよ。バイオリンも上出来です。子どもたちの将来について、小さいときから、基礎を作ってあげましたが、これからどうなるか分かりませんが、本人次第です。親としての努力を果たしたつもりです。
10. 息子は中学校のときにいじめに遭いました。日本生まれ日本育ちの息子は、日本語が全く問題がないのに、親が外国人のため、同級生にいじめられました。一時期精神的に大変不安定な状態でしたが、最近やっと落ち着いてきたように思います。外国人として異国で生活するのは本当に大変です。特に思春期にあったいじめは、一生心の傷として残るだろうと心配しています。うまく乗り越えるように心から願っています。代わってあげたいくら

いです。見守るしかできないのが辛いです。

11. 子どもの学習言語（日本語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは全て支障なし。

12. 子どもの母国語（中国語）の習得は、書く・読む・聞く・話すことは単語程度。

考察：留学生同士の結婚であり、親の世代が子育てに特に教育に、いままでの例とは違った熱心さを感じられた。数々の習い事をみる限り、それを支える時間的と経済的な豊かさは、一般の家庭では到底もち得ないように思われる。生活の基盤は日本にあるようで、子どもに対する母国語教育は、教育熱心のわりには、それほど熱心さを感じられなかった。子どもが色々な才能を持っているようだが、外国人としての自国意識やアイデンティティーを確立していないように考えられる。外国にいながら、自国意識やアイデンティティーを確立することは容易ではない。これから成長していくと、母国語と学習言語の習得は差がどんどん開いていくであろう。学習言語を着実に習得し、母国語をレベル・アップしながら自分の持ち味とし、個性や能力でこれからの人生に立ち向かっていくことが望まれる。

#### まとめ

外国人の子どもが母国もしくは家庭で学んだ母国語（第一言語）と日本に来てから学んだ学習言語との関係は、いかなるものであろう。母国語と学習言語の優位性について、研究者の間でもかなり意見が多岐に分かれる。すでに母国語を十分に使用することができる時のみ、子どもは第二言語の能力を十分なレベルに到達させることができるという Cummins (1979a, 1979b, 1981) の発達相互依存仮説が有力であった。

脳科学者の立場から、川島(2003)は母国語と外国語を使用しているときに脳を測定すると、バイリンガルとそうではない人の脳の反応が異なると立証した。さらに、現実問題として、バイリンガルの中には、母国語の取得ができていない人もたくさんいる事実をあげ、どの段階で外国語を学習すればよいのかは、定論がないことを指摘した。そもそも、バイリンガルであるかどうかは、母国語と学習言語のレベルの問題が存在する。挨拶程度で済むならば、もっと大勢の人々がバイリンガルと認定されるであろう。しかし、ハイレベルの言葉を理解し、母国語と学習言語の両方で「書く・読む・聞く・話す」の各段階をクリアできるバイリンガルは少なくなるであろう。前述した「三項関係」があつてから、つまり話したい相手がいる、話したいものやことがあつてから、コミュニケーションを取ろうとする動機が芽生えてくるものである。要するに、言語発達のみならず論理的な思考能力の発達も伴うことが必要である。両方のバランスや調和がとれ、さらに優れた人間性の持ち主こそ、兼ね備えたコミュニケーション能力があると推測する。

今回の8つのケースの中、ケース1, 5, 6, 8の被験者本人は来日の動機が留学であった。被験者本人は強い学習動機があつたから、子どもの教育に対しても人一倍熱心だと見受けられた。また、ケース1, 5, 6, 7のように、配偶者が日本人であるにもかかわらず、子どもにとっての外国語である中国語を勉強させるのは、いかに環境的に不利な条件を克服し、努力をしていることが分かった。ここで、言語学習には「動機」がキーワードだと考えられる。ケー

ス・スタディーの中で、親世代は母国語をしっかりと習得した上で、強い学習動機で、困難を乗り越え異国で成功し、子育てをしているわけである。しかし、日本に生活している次世代には前述した「三項関係」によって、親とコミュニケーションをとる動機があるとしても、元々第二言語に対する学習動機が弱いことが推察できる。このように、元々「弱い動機」で始めた言語学習はなかなか身につかないことが予想できる。Ellen Bialystok & Kenji Hakuta (1994)は重野 (2000) の訳本で『外国語はなぜなかなか身につかないか』のはしがきに述べたように、言語学習は「脳、言語、心、自己、文化」の生態的な環境を構成し、その全体のアプローチである。次世代の母国語や学習言語を動機づけるのは、まさに生態的な環境の中の中心である「心」に尽きる。ケース3のCさんの長女のように、子どもが自ら意欲的であれば問題はないが、目的意識の持たない子どもにはどのように動機づけるのかがネックである。

最後に、母国語と学習言語の習得程度の評価について、全体には有意差がみられなかった。これは、子どもの言語習得年数にも関連し、被験者の主観的な判断に委ねた。しかし、実際にどの程度できるのかは、より客観的な評定が必要だと思われ、今後の課題として残された。異文化における言語環境の整備と言語教育は、影響する因子が煩雑であり、統制できないところが難点である。前回と今回の調査を通して、考察してみると、異国においても親は物理的に厳しい条件の下で、困難を乗り越え子育てする姿は素晴らしいものであると改めて感じた。子に対する親の気持ちはいつの時代でも変わらないと思われる。グローバル化の現代社会では、今後多言語教育が続くであろう。その中で、何を重視すれば良いであろうか。多言語を教育するに際して、それぞれの言語体系の文化を理解しながら、アイデンティティーを確立することをベースにしたうえ、言語スキルを磨き上げ、脳の活性化による理解と共にフィーリング(心)で感じ取ることが理想であろう。その中でも、こころとつながる「動機づけ」は大切である。なぜなら、「心のない言語」は、この世の中では必要がないと思うからである。

#### 参考文献

1. Cummins, J. 1979a Cognitive/Academic language proficiency, linguistic interdependence, the optimum age question and some other matters Working papers on Bilingualism, Vol.19, pp.121-129.
2. Cummins, J. 1979b Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children Review of Educational Research, Vol.49, pp.222-251.
3. Cummins, J. 1981 The role of primary language development in promoting educational success for language minority students in Office of Bilingual Bicultural Education(eds.), Schooling and language minority students: A theoretical framework, pp.3-49, California State Department of Education, Los Angeles, CA.
4. 陳 惠貞 2008 「子どもの言語発達と異文化における多言語教育」 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会『言語文化』第16号
5. エレン・ピアリストク&ケンジ・ハクタ 重野 純(訳) 2000 外国語はなぜなかなか

身につかないか—第二言語学習の謎を解く 新曜社

(Ellen Bialystok & Kenji Hakuta 1994 In other words – The science and psychology of second-language acquisition BasicBooks, A division of Harper Collins Publishers, Inc.)

6. 石井 正子 2004 教育心理学 樹村房、pp.8「三項関係」
7. 川島 隆太 2003 子どもを賢くする脳の鍛え方 小学館、「母国語と外国語」pp.149~151